

# 鷹橋賢由先生 特別講義

講題 大垣真宗学院とともに



こうして三帰依を唱和させていただくたびに思い起すことは、私をはじめて仏教を学ばせてもらった頃、「相応学舎」という聞法会で安田

理深先生のお話を聞かせていただきました。その時に最初に三帰依文を唱和されました、そのお姿です。会場は大谷専修学院院长の信国淳先生の役宅で、ぼそぼそという感じですが、しかし非常に存在感のある、響きのある三帰依文を聞かせていただきました。

私の出発点となったのは、一九六一（昭和三十六）年四月です。宗祖の七百回御遠忌が勤まりました。その御遠忌のお蔭で今日の私があります。これだけは言っておかなければならない大事なことです。私はこれでも大谷大学真宗学科の卒業生です。でも卒業ぎりぎりの単位だけで、卒業はしたけれども何の中身もなく、ただうろろしてしまいました。

七百回御遠忌は、この前の御遠忌のように単に御遠忌だから勤めますというのでなく、宗門再生の胎動を感じるような雰囲気がありました。たまたまそこに生まれ合わせてというか、御縁をいただいて今日の私があるわけです。本当に何物にも代えがたい、まさに勝縁をいただきました。真宗の教えというのは本当に大事なものだということ

を教えていただいたことでした。

そこへ至るまで何をしてきたかというところ、寺の長男に生まれて大谷大に通いながら、生きていくことが嫌だったんです、辛かったのです。灰色の青春と言いますけれども、灰色どころではなくて、もう真っ暗なトンネルの中みたいな青春をずっと送っていました、毎日、どうやって死ぬかみたいなことを考える生活でした。そんな中で卒業間近に教師修練があり、別に受けなくてもいいけれども、うろろろしているのもしようがないし、家へ帰るのも嫌だし、と暇つぶしに参加しました。ほんとにふざけた話です。

ところがそれがまた大変な御縁になりました。そのときの私は、優等生になろうとか、認めてもらおうとかという思いがまったくないものだから、言いたい放題、やりたい放題でした。

後から紹介しますが、講師は蓬次祖運ほうじそん元九州大谷短大長という方でした。班担は大谷大の一楽真教授のお父さんの一楽典次先生でした。

そういう人たちに向かって、「大体お寺ってけしからん」「ナンマンダブツ、ナンマンダブツって、何とかならんのか」「みたいなことを言っていました。修練生が講師や班担の先生に、悪態ついていただけです。

班担の先生が、「南無阿弥陀仏がうるさいなら取り上げてもいいけれども、取り上げると何か代わりをあたえないといけないよ」、「子どもが飴玉をしゅぶってるのを取り上げたら、何か代わりのものを与えないといかんやろ、なんかやるもんあるか？」と言われまして、はたと困ってしまっただけです。

また、「仏教はけしからん」という君の言う仏教っ

て一体何や」と反問されまして、仏教について何も知らないということに初めて気づかされました。

「あんたの言うナンマンダブツって一体何なのか。人にとって要るものなのかどうかも分からないまま、やめろと言っているもだめだろう」と。

今でも、当時の私のようなことを思いながら、この真宗学院に来られる方もいるわけです。そんなことを一緒に考えてみたいということもあって、わざわざ恥かき話をさせてもらっているわけです。私の言っていた仏教とは、後に気づいたのですが、それはなんと、私の父親の姿でした。

「坊さんってけしからん」、と思っていた坊さんとは、父なんです。

「仏教って何や、捨ててしまえ」といういた仏教とは、父の生活そのものでした。

朝になったらどこかへお参りに行って、帰ってきたら家の中でぶつくさ文句を言っている。これが仏教だと思っていたのです。

「捨ててしまえと言っている仏教とは何なのか。中身をわかってからなら、こんな仏教はいらんと、いつでも捨てればいい」と言われて、「はい分かりました。私は解ってから捨てます。今から仏教を勉強します」といって修練が終わりしました。

そんなことがご縁で、私は、先ほど言いましたように、一年間全寮制で勉強する宗門の教師養成機関である大谷専修学院の、こともあろうに学生ではなく職員に採用されたのです。

採用はされたのですが、一コマの授業も持てないわけです。先輩たちはそのことを分かっていたんでしょかねえ。「まあいいからあんたも学生と一緒に聴きなさい」とって、学生と同じ生活をさせていただきました。

しかも、職員として採用されたんですから月給

もらっているのです。

そういう状況の中でなんと五年間もお育ていただきました。

宗門が、この私のために月給を払って仏法を聞かせてくれました。こんなことでもうないでしょう。

多分、後にも先にも私一人だと思っています。何かのまちがいだったのかも知れません。

この御恩に立ち帰りながら、この学院のお手伝いをさせていただき、聞法させてもらっています。

□ ■ □ □ □ □ □

そのころの私は、信国先生の院長宅で月に一回開かれた「相応学舎」の安田先生のお話と、信国先生自身が週に一回、月曜一限目に講義される「歎異抄講義」を学生さんと一緒に聴講することが任務でした。

「相応学舎」の講義は四、五日続き、私は岡崎に住んでいて講義は高倉だったので、大きなオーブリールの録音機を担いで市電に乗って運び、それをガチャガチャやりながら録音して、ひと月かかってテープ起こしし、印刷に出して小さな冊子にして、先輩方、同輩方に郵送するのも私の仕事でした。その時に、毎回聞いたのが先の安田先生の三帰依です。

この御遠忌の雰囲気を分かってもらえたらと思って探していましたら、こういう本がありました。蓬茨祖運先生の「伝道講究所」における講義をまとめた『観無量寿経講話』です。この本はすごいなっています。

善導大師の『観経疏』をベースにしなが観経を一字一句講義されたものが収録されているんです。

当時教研におられた宮城顕先生方がこれをまと

めてくださった。本当に貴重な本だと思います。

皆さん方のお家を探したらどこかにあるかも知れませんが。何とか読んでいただけたらなと思います。

この本の「あとがき」に、「さる昭和三十七年の五月から三カ月にわたって伝道講究所が開設された時、参加者とともに観経を読みながら講じたのが本書である。(中略)参加された住職方の苦勞も大変なものであったにちがいない。(中略)三カ月も自坊を空けることはだれでも容易にできることではない。しかも食や住に質素を極め、後半は京都特有の蒸し暑い夏であった(中略)しかし、その定員に満ちる住職方が集まったということとは、宗門にまだ気骨のある青年がいるという証で、本書はその内容よりもそうした意味の記念として尊いと思う」と書いてあります。

そんな宗門の空気の中で私は学院に拾われ、勉強させてもらったラッキーボーイです。お育てをいただいた本当に瞬間の五年間でした。報じても報じきれないものを感じます。

それは宗門を挙げて活気にあふれた、みんなが道を求めようという雰囲気になっていた、それが同朋会運動初期の頃です。それを今、どうやったら回復できるのかということを考えていかねばならないと思います。

大谷専修学院を辞めた後も、宗門には大変お世話になりました。昭和四十二年、当時の訓覇内局最後の教区駐在教導に任命されました。訓覇内局最後の駐在教導であったことは私の自慢話です。仙台教区に配属されましたが、あまりの寒さに耐えきれず、一年一ヶ月で辞めました。

しばらく家でぼんやりしていたら、大垣の駐在がないのでお前やれということになって、教務所がどこにあるのかも知らずに赴任しました。

私が赴任した当時、今の本堂が建て替え工事中で、小川謙了教務所長兼輪番さんが、長く教区に居て下さり、私に声を掛けてくださったのです。

当時の駐在は机に座っていない駐在でした。「教務所の机にずっと座っておるようなものは駐在ではない」と訓覇内局で叩き込まれていたのですが、大垣には「大垣真宗学院」の前身にあたる「夏期学校」があって、これを手伝いなさいと言われました。

私は人様に教えられるような者ではありませんと辞退したら、「あんたの勉強になるんだからやりなさい、とにかくこのテキストを持って一緒に読んでいければいいから」と言われて始まったのが、大垣真宗学院との関わりのはじめです。

それ以来、ずっと仲間を探しながら、この「大垣教区をどうするか」、を考えながら教区と一緒に生きて参りました。いや、教区と共にというより、この真宗学院と共にと言ったほうがいいかも知れません。

□ ■ □ □ □ □ □

そんな宗門の状況の中で、昭和三十七年から「同朋会運動」が発足したのです。みなさん方、同朋会運動をどの程度ご存知なのでしょう。

今では同朋会運動は完全に終わりました。「終わりましたね」っていったら、「いや、まだ始まっているんだよ」と言った人がいました。そのとおりです。

本山は同朋社会を顕現しようと「家の宗教から、個の自覚の宗教へ」というスローガンを掲げて、三本柱の施策を打ち出しました。一つは特別伝道、二つ目は本廟奉仕、三つ目は推進員の発掘と養成。この三つです。これを実際に各教区に降ろして実行するにはどうしたらいいかということ、

予算も限度がある中で精いっぱい使い、でも全教区で一斉に進めてゆくことはできず、三十教区から十教区を選んだんです。大垣もその一つでしたが、大垣教区全部を対象にもできず、二カ組を指定組として重点的に始まったのです。

教団がようやくすこしうごめき始めた頃、昭和四十四年に「開申事件」と言われている教団問題が起こったのです。初めて聞いたとき、これは何かなと思いました。たまたま本山にいたら、開申や開申やと大騒ぎなのです。

法主が内局に対して命令を下すことを開申というんです。開き申べるとは、お上が内局に命令するということ。当時は法主と住職と管長の三つの位を一人が兼任していたのですが、そのうちの「管長だけを新門に譲るための然るべき手続せよ」というものです。

これは一体何だろうかと探っていったら、お金の問題が出てきました。前法主の四男、今の門主の弟さんになる明證院、その人が祇園で遊び始めて、はじめは借金一五〇〇万円という話だったのですが、そのうちに法主の白紙の約束手形が出てきました。手形は切ると一人歩きますから、どんどんと大変なことになって、十何年間も続いたのが教団問題です。

ついでの間、やっとかたは着いたんですが、取られるものはみんな取られて、やっとこさ本山の建物だけは残ったという感じでしょうか。

本山を護るために一生懸命でしたが、「同朋会運動」はどこかへ行ってしまった。そうじゃないと当時は言っていました。残念なことですが、否めないことだと思います。残念なことですが、「同朋会運動」は完全に終わったと認識した方がいいんじゃないかと私は思っています。

今、宗門は何をやっていますか。やっているのは門徒戸数調査と教区再編です。これが今、宗門で一番大事な仕事だと言っているんですよ。それは大事なことです。お金欲しい、どうやったらお金が儲かるかというところに全精力を傾けています。

「同朋会運動」は、同朋会を作るだけの運動ではないんですよ。根っこは信心の行者・念仏者を生み出す運動だったんです。そのことを忘れてしまってお金、お金と言っています。

私がずっと前から言っているのは調査の方法がおかしい、間違っている。そう言い続けているのにいまだに誰も耳を貸さないのです。

お金を出してくれる人が何人いるのかを、正直に届けなさいという調査です。回数を重ねるたびに減少することが目に見える調査方法なのです。

もうひとつは教区再編といって教区を合併する。何で合併するかといえば、人件費が減って、経済的な負担が減るからだという。

教えを広める、教化事業はどうするんですか。そんなことは全然考えてないんですね。合併第一号は岐阜教区と高山教区です。すけれども、当事者の方はよくお考えください。私はもうどこにも物を申す場がありませんのでここで叫んでいるだけです。大垣教区はそんなことしない方がいいと思いますね。

この真宗学院を中心にして人材養成に力を注ぐべきです。お金を集めるといふ仕事はその後でしょう。

人が生まれれば浄財は出て来るはずなんです。あと何年、何カ月持つかは分かりませんが、生きて居る間はこの真宗学院のみなさんとともに、本当の意味での「同朋会運動」に取り組んでいき

たいと思っています。

もう少し申し上げたいのですが、この大垣真宗学院は私が初めてお手伝いしたころ、今の代大垣別院の本院のもうひとつ前、戦争で焼かれた後にできた御堂があったのですが、その片隅の部屋を借りて「夏期学校」が開設されていました。

その後、今、駐車場になっているところに旧幼稚園舎があって、小さい園児用の机、椅子で勉強しました。

今の本院が完成し、階下にあった教務所の部屋を使ったりして、続けてまいりました。

そんな状況を経て、この新しい学舎が二〇一四年十二月に竣工しました。もう三年近く経ちますが、この校舎が建つまでには随分と苦労がありました。

その前にも苦難の時代がありました。

この学院を卒業すれば教師資格が得られるという制度、規則がなかったのです。ですからここを卒業しても本山の検定試験を受けなければならなかったのです。

当時は、大垣はじめ全国に三カ所しか学院がなかったのです。それを本山に掛け合せて、あっちへ走り、こっちへ走りながら、いろんな人のご協力をいただき、今日の制度が実現しました。ほんとうに大変でした。

時代が変わって夏期学校が三年間では無理だということになり、修学年限を一年間延ばしてもいいという一行を付け加えてもらえないかと、これもまた大変な思いをしたことでした。

でも、一番困ったのはこの校舎を建てる時です。そんな馬鹿なことがあるか、ということが起りました。



教区は、教区会で、予算・決算が議決されてそれによって運営されています。その議会で「真宗学院の校舎を建設しよう」と議決されたのですが、何と当時の教務所長（大垣真宗学院長）が、その議決されたことに反対されたのです。

本当はこの校舎は、今の二倍ほどの建坪の計画だったのですが、幼稚園を絡ませて、ここに学院を建てさせまいとされたのです。

ここには幼稚園の建物を見て、学院は、土曜日しか使わないのだから、月々金は、幼稚園が使い、土曜日だけ学院に貸すから、建設資金負担するようにしようというものでした。

それはやめてほしいと、あちこち掛け合って幼稚園を何とか少しひっこめさせて、狭いけれどがまんするからここに建てさせてほしいと校舎が出来上がったのです。今では学院以外にも大いに活用されていて、教区のみなさんに喜ばれています。学院の校舎を建てるということは何も反対されるようなことではない。むしろ進んでやらねばならないことだと思ふのですが、宗門の現状には、それに反対する勢力が宗門官僚の中にあるという、そういう一面もあることを忘れないでほしいと思います。

なかなか政治の世界というのは思うようにはいかない、難しいものですね。

このごろ、気になっていることを申し上げます。変な話かもしれませんが、私たちは日常、阿弥陀さまとかほとけさまという言葉をよく使いますが、どうも何か気になって仕方がない。

ほとけさまっていわれるとわかったことがわからんようになってしまふ、阿弥陀さまっていうと何か話がぼけてしまふ、私は何かそういう感じが

するので。

辞書にはいろんな用例のついでに、また、一般的には、ほとけさんというのはお釈迦様のこと、悟りを開いた人、という意味、もうひとつ一般的なのは、死んだ人、という捉え方だと思いません。

私たち仏教、真宗を学んでいる者はどう理解しているのか、どう捉えているのかなと思います。公開講座を聞いていても、いつのまにか「阿弥陀さん」は、という話になるんですね。「阿弥陀さん」というその「阿弥陀さん」はいったい何なのかを問わない。

みなさん、そんなことはありませんか？阿弥陀さん、ほとけさんといってわかるんですか？われわれが依り所としている教行信証の一番最初に、

それ、真実の教を躓さば、すなわち『大無量寿経』これなり  
(聖典一五二頁)

三部経が所依の經典なんですけれども、中でも大経が真実経だと言われている。

『大阿弥陀経』という異訳の經典もあるんですけれども、それを使わずに「大無量寿経これなり」とある。

『仏説無量寿経』なんですよね。「無量寿」という言葉は漢訳されて、漢の人、日本人に通ずる言葉です。

阿弥陀「アミタ」というのは外来語です。

英語の堪能な人なら英語で理解できるかも知れないですけども、英語のできない人は日本語にしなければ理解できない。梵語をわからないものが、アミタと言われても分からないので、わかる言葉にしたなら、「無量寿」という言葉になるんで

しょう。

この「無量寿」という言葉をどうしてこんなに使わないのでしょうか。

阿弥陀の本願というとか分かったようなことになっていきますけれども、言い換えると、「無量寿の本願」ですね。

無量寿って何ですか。無量寿経の始まりというのは正宗分のところで見ますとね、

乃往過去 久遠無量 不可思議 無央數劫 錠光如来 興出於世  
(聖典九頁)

というところから始まっています。

錠光如来とは、異訳によると燃灯佛、灯を作る仏という、それが錠光如来です。そこから始めて、ずっと五十三仏が出てきて、最後のところで世自在王仏が出て、その世自在王仏に國王が法蔵と名のって出遇うわけです。この出遇いというのは何が伝わってきたのかということ。五十三仏によって何が伝えられてきたのか。一番最初は何だったのか、無量寿経の始まりです。無量寿の始まり、これを説くのが正宗分です。

無量寿、いのちが始まる一番最初を大経は燃灯佛、錠光如来という言い方をしています。それがずーっと受け継がれ、相續されて、そして法蔵が生まれて、法蔵がやがて成仏して、阿弥陀になっただんです。

阿弥陀になったと言ってしまうましたが、無量寿になったんです。無量寿佛になったのです。

その無量寿になった法蔵が何を問うたのかという、

拔諸生死 勤苦之本  
(聖典十三頁)

「もろもの生死勤苦の本を抜かしめん」ということを願として起こします。これが最初の「願」なんです。

それが成就するのですから、これは、いのちが願いを建てた最初です。これを「本願」というのでしょうか。

本願の本とは勤苦之本の「本」、世間で「抜本的に」という使い方をしますが、根本から解決しようということ。その言葉のものは、ここに

あるのです。  
「もろもろの生死、勤苦の本を抜かしめたい」というのが法蔵、もつと言えば法蔵以前から、いのちが願ってきた願いです。だからこれを本願と言うたり、誓願と言うたり、あるいは宿願と言うたりする。

宿とは昔という意味です。阿弥陀の本願というたらまた訳がわからなくなるんですが、これは「無量寿の本願」なんです。

こういう「無量寿のいのち」。われわれの生きているいのちは「生死しているいのち」。この二つがあるわけでしょう。生死するいのちが、無量のいのちを受け継ぎ伝えてきた、はたらきを持っているんです。

生命が誕生して以来、ずっと続いている永い年月、私どもは無量寿と言われても言葉だけではなかなか実感できませんけれども、先ほどの「乃往過去 久遠無量 不可思議無央数劫に」という単位で書いてある、ずっと昔に始まったいのちが、ここまで伝わってここからまた何万年続くのかかわりませんが、そういういのちがありますね、それを無量寿と言うてきたんです。

これは非常に有り難い、めでたいのち、ことほぐべきいのち、とおっしゃっているのが長谷正當先生Ⅱ京大名誉教授Ⅱです。長谷先生は大垣真宗学院の卒業生でもあり、『本願とは何か』『浄土

とは何か』(共に法蔵館という本を出しておられます。ぜひお読みください。

□ □ □ □ □ □ □ ■

いのちと言っても、ずっと続く無量のいのちと、生まれたものは必ず死んでいくいのちの二つが一つになってずっと無量寿が相続されてきているこの感覚です。

ですから「阿弥陀の本願」といわずに「無量寿の本願」というべきではないか、そう考えるべきではないか、そうしないとよくわからなくなってしまうのではないかといいことです。

最後に信国先生のお言葉をご紹介します。昨年十一月九日、京都の大谷専修学院の校舎を壊すというので「感謝のつどい」が催されて、参加しました。その時、先生の書を記念品にいただいたので、この総会を記念して扁額にして寄贈しようと今朝持ってきました。

われら 皆共に安んじていのちに立たむ  
いのち すなはち 念佛往生の道なればなり  
です。

また、学院の外の掲示板に信国先生の言葉として、

無量寿そのものが 「汝 無量寿に帰れ！無量寿に帰って無量寿を生きよ！」と呼び掛けている

という言葉を書きました。これは先生最後のご講義で遺言のようになっております。

まさに、無量寿ということをもっときちんと取り上げて、その意味を、阿弥陀、アミタではなくて、無量寿という言葉で感覚できるものを大切にしていかなければいけないのではないかといいことを思います。

その信国先生は昭和五十五年一月に講義後に倒れられて、二月五日に亡くなられたのですが、ちょうどその時、私は御恩返しのためで大谷専修学院の修練補導をさせてもらっていた五年目で、学院生と共に本山の山門で送ったことを記憶しております。

昨年、同窓会でも申したのですが、先生は「念仏を称えずにおられない私になった」という言い方をされておられますね。「すずめがチュンと鳴き、カラスがカァと鳴くのと同じように、私は南無阿弥陀仏と念仏申す身とさせてもらいました」とありまして、私は本当にすごい言葉だなと思います。

まさに私たちが生かしている無量寿との出会い、無量寿に目覚めた方が初めて言えるのではないかなと思います。けっして努力せよとか無理に言いなさいということではなくて、その人の中から南無阿弥陀仏と出て来る念仏を、私どもははっきりしていかなければならない大事なことだと思わされております。

信国先生のマネをして、みなさん方と一緒に念仏を称えてみたいと思います。三回称えましょう。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」。

最後にひとこと、『仏説無量寿経』の中には阿弥陀とか阿弥陀仏という言葉は一言も使っていないんですね。御存じでしたか？『観経』、『阿弥陀経』には出てきますが『大経』には使われてないので。最近、初めて気がつきました。「無量寿」が尊いのです。

ありがとうございます。

へ 以上 抜粋